

KONAN UNIVERSITY

# 『ワーク・ライフ・バランス』を超えて - 仕事と生活の統合モデルから見る子育て (2010年度 公開シンポジウム報告 父親の子育て 母親の子育て)

著者	中里 英樹
雑誌名	心の危機と臨床の知
巻	12
ページ	33-43
発行年	2011-02-28
URL	<a href="http://doi.org/10.14990/00002709">http://doi.org/10.14990/00002709</a>

## 『ワーク・ライフ・バランス』を超えて ——仕事と生活の統合モデルから 見る子育て

中里 英樹

甲南大学文学部社会学科教授。専門領域は家族社会学。人生全般に渡る親子関係や子育て環境の問題について、歴史的な資料や現在の調査の数量的分析などを通して研究を続けている。自治体の男女共同参画関連の審議会委員なども多数務めている。

中里です。よろしくお願いたします。私には先ほどの大日向先生の引き込まれるような話術はありませんので、家族ネタ、動画、写真、なんでもありで、進めてまいりますので、よろしくお願いたします。

タイトルは『ワーク・ライフ・バランス』を超えてです。ワーク・ライフ・バランスという言葉が流行っていて、私自身の研究に関して説明するのもその言葉が一番通じやすくして便利なんですけれども、社会学者というのはいかに何が流行ってくるかとそれと違う言葉を使いたがります。もともと私自身、

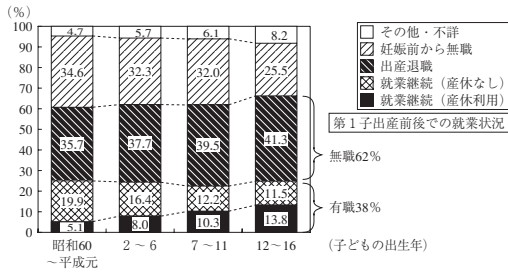
実はワーク・ライフ・バランスという言葉はあまり使わずに済ませてきて、「仕事と生活のことについて研究している」と言ってきました。その意味するところは話していく中で追い追いつわかってくることだと思えますので、内容に入ってまいりたいと思います。

母親の悩みということについては、先ほど大日向先生から本当に引き込まれる話があって、みなさんご自身の生活とも重ね合わせる部分もあったんじゃないかと思うんですけど、ここは非常に大ざっぱに飛ばして、そのあとのあえて社会的に見てどうなのかというあたりに私の話は中心を持っていこうと思います。

こちらも大日向先生のご説明にありましたけれども、現在でも子どもを産んだときに女性が仕事を辞める率、あるいはその前から辞めている割合は非常に高い。これは「子どもの出生年別 第一子出産前後の妻の就業経歴」(図1)です。第一子を産んだ女性の就業経歴がどういうものであるかを示すものです。第一子の出生年が昭和六〇年〜平成元年というところから五年ずつ変化してきました、一番新しいところでは平成一六年に第一子が生まれた女性に移っていています。

先ほど所長の挨拶で、女性の育休の利用が進んできていますが、今年はずがったという話がありました。全体として利用率は高まっている。育児休業を取って就業を継続している人の割合は

図1 子どもの出生年別第一子出生前後の妻の就業経歴



(備考) 1. 国立社会保障・人口問題研究所「第13回出生動向基本調査(夫婦調査)」より作成。

2. 1歳以上の子を持つ初婚どうし夫婦について集計。

3. 出産前後の就業経歴  
 就業継続(産体利用) 第一子妊娠前就業～育児休業取得～第一子1歳時就業  
 就業継続(産体なし) 第一子妊娠前就業～育児休業取得なし～第一子1歳時就業  
 出産退職 第一子妊娠前就業～第一子1歳時無職  
 妊娠前から無職 第一子妊娠前無職～第一子1歳時無職

(出所) 平成22年版男女共同参画白書P D F版)

じいさん、おばあさんに預けるか。おじいさん、おばあさんに預けるというインフォーマルなサポートは昔から日本の中でやっていた。それがだんだん減っていった。制度的な育児休業が受けられるだけであって、仕事をずっと続けている人の割合はこの二〇年近くほとんど変わっていない。七割ぐらいの女性は第一子を産んだときに仕事を辞めている。女性の社会進出と言われますが、出産した段階でいったん社会から退くような形になってなるというのが一般的です。

高まつてい  
ますけれど  
も、その分  
育休なしで  
就業してい  
る人は減つ  
ています。  
つまり、育  
休なしで仕  
事を続けら  
れるという  
のは保育園  
に預けるか、  
あるいはお

専業主婦になった母親たちの孤立した子育ての様子は、先ほどの大日向先生のお話にあったところですが、ここでは、調査結果というのではなくて、皆さんがどなたでも見られるインターネットの子育て相談のウェブサイトをみてみます。これは子育て中のお母さん個人で運営しているサイトで、非常に正論を書き込んだり、激論になるということではなくて、わりと共感的なコメントのウェブサイトです。

「夫は激務でこの三連休も出勤。平日も朝早く、帰りも遅いので、子どもたちに会うことはほとんどありません。ほとんどのお母さんが二人、それ以上の子どもを育てているのに自分だけ愚痴ってすみません。でも、育児に追われまくる毎日に疲れました。休みたい」と。これは一人の方の意見ですけども、これに対する共感の言葉も書き込まれますし、こういう書き込みが繰り返して出ています。それから私が子育て中のお母さんにインタビューする中でも同じような状況は語られています。

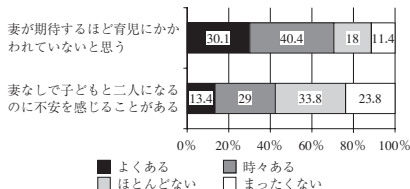
私自身も第一子が生まれたのが一九九八年で、今小学校六年生です。甲南の前の大学が三重県で、周りに親戚も知り合いもない状況で引越していったので、そこで第一子の子育てを妻が始めたんですね。私自身こういう研究に関心を持っていただけのようになりますようにしようとしていたんですが、やはり妻の様子が変わっていき、子どもに対して怒りやすくなったり、あ

る日泣かれてしまうようなこともありました。「自分にはスーパーと家の往復しかない」というのです。なるべく妻が外に出られるようにいろいろやってきたつもりだったんですけども、そういうことで抱え込んでいたことがよくわかって、自分がこういう研究をしているのにそんな状況に追い込んでしまったことに非常にショックを受けました。

そのときちょうど大日向先生の『子育てと出会うとき』[日本放送出版協会、一九九九]という本が家にあっただけです。研究関係で置いてあったのか子どもが生まれてから買ったのか忘れたんですけども、まさに自分の妻が置かれている状況と同じ女性たちの声その本の中に書かれていました。その心中をそのまま描いているようでした。私自身も子育てに疲れてはいるので精神的にもろくなっているところがあって、夜中に読みながら涙したのを覚えています。

一方で、両立の負担もあります。仕事を辞める女性は多いですけども、パート等で再就職する女性も増えていきます。ただし、先ほどありましたように、正職員、正社員ということではなくてパートが多いですし、なかなか就業環境は厳しいということもあります。その中で母親が抱える不安、悩みがあります。これ「↓写真」は僕の妻ではありませんんで、ある有料のネットのサイトでとってきた写真です。思うように仕事ができない。家の中で料理の準備をしながら仕事の電話をとっている写真だ

図2 父親の思い



(出典 木脇奈智子研究代表者『育児をめぐるジェンダー関係とネットワークに関する実証研究 研究成果報告書』(2003年))

と思います。こういった悩みを抱えるお母さんもいる。逆に、仕事が忙しすぎて思うように子どもに関われない方もいらっしゃると思います。特にある程度子どもが大きくなって職場に復帰したときにこういうことが起こってくる。

では、父親の悩みは何でしょうか。これも先ほど出てきたのではありません。長時間を使いませんけれども、悩みが全くないというのも先ほどのお話にありましたし、実際のアンケートを見ても、「楽しい」があれだけ出てくる。僕自身は八割は苦しいとか腹が立つとかのようない気がありますが、「非常に楽しい」というのがありました。

これは奈良県で何カ月かの健診に来た人たちに配ったアンケート(図2)で、お父さんに聞いたものです。ちょっと見づらくんですけども、一番左から、「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」「全くない」という区分です。「妻が期待するほど育児に関われていないと思う」というのが、「よくある」「ときどきある」で七割ぐらいです。ですから、今の社会の中で父親の子育てに対する期待が

高まっているという認識がありますので、妻の言葉の端々にもそういうことが感じられるが、七割ぐらいが関わっていないと感じている。

もう一つは、母親にはかなわないという話がありましたけれども、「妻なしで子どもと二人になるのに不安を感じることもある」は、半分はいいんですけども、四割以上の人がそういうことを感じている。ですので、わかっている。関わらなくてはいけないと思うんだけど、自信がなかったり、時間がなかったりするのでできないと感じている。

私が講師として参加したある父親講座は、この会場に主催者の方がいらっしやっていますが、母親がヨガとかりラックスする企画を持ちながら、父親が子どもを連れてある部屋に集まって、父親の子育てについてディスカッションしたり、私の話を聞いたりというイベントです。その講座に参加した男性の発言を見てみます。「できるだけ関わろうとしているけれども、奥さんからは足りないと思われるんじゃないか。ほかのお父さんと比較されているような感じがする」。私もそうなんですけど、「ごっこのお父さんは日曜日にはご飯を作っているらしいよ」とか言われると、比べているつもりはない、単に事実を述べているだけだと思うんですけども、後ろめたいところがあると比較されている気がしてしまふ。

ほかに、「アドバイスしようとする」と言うさいと言われる」

とか、「わからないの言わないでと言われる」というのもあります。「神経を使うところにずれがある」というのは、こちらが心配なところでは非常に大ざっぱで、逆にこちらがどうでもいいんじゃないかというときに細かい神経を使うことで妻との間にずれを感じるというものです。「奥さんが子どもにきつい対応をするのが気になってるんだけど、自分が子育てをやっていないからあまり言えないと思って、どうしたものか悩んでいる」。お父さんも悩んでいないわけじゃなくて、こういうところに参加するお父さんですから積極的な方だと思うんですけども、悩んでいるんです。

次は、私自身の子どもの映像です。一番下の子どもは今小学校一年なんですけれども、その子が三歳くらいだったか、もっと小さかったか、私の妻が出掛けた直後の映像です。「子どもが泣いている映像」「言えは言うほど。ご飯を食べようと言っても、『ママがいい』。これは一五分ぐらい続いたんですけど、このままで終わってしまうと、やっぱりお母さんがいいですねというお話になってしまうので、この続きは後ほど最後のほうにお見せしようと思います。

このように父親が参加したくてもなかなかできなかったり、自信がないという状況。それでお母さんは孤独な子育てになってしまうという社会的な背景を考えていききたいと思います。現在もその社会の形が続いていると思っていきたいと思います。高

度経済成長期来の家族と仕事のモデルというものがその背景にあるだろうと思います。これは出発点としては日本だけの問題ではなくて、むしろアメリカから入ってきたような家族と社会のモデルと言えると思います。

アメリカの有名な社会学者でパーソンズという人がいます。

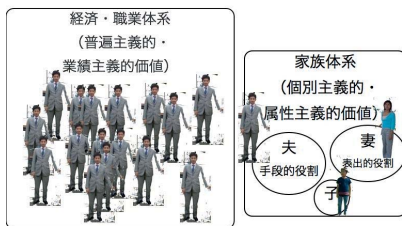
五〇年代に社会システムについて、あるいは家族についての本を書いていきます。その中で示しているモデルとして、こういったものがあります(図3)。先ほどの濱田さんの発表で公と私というものがありません(図3)。先ほどの濱田さんの発表で公と私というものがありません(図3)。先ほどの濱田さんの発表で公と私というものがありません(図3)。先ほどの濱田さんの発表で公と私というものがありません(図3)。

この領域はこういことが主要な価値観になっている、この領域はこのようなことがあるということがありまして、家族のほうは個別主義的、属性主義的価値にのっとった社会。経済・職業体系のほうは普遍主義的、業績主義的。

つまり、個別主義というのはいずれに合わせてルールが変わる。普遍主義というのはいずれのルールをどこに行っても適用する。そして、属性主義的というのはいずれの人が誰であるか、自分の子どもであるか、長男である、末っ子であるというふうな、その人が何であるかによって判断しようとするのに対して、経済・職業体系のほうは、その人が何をしたか、何ができるかと

図3 公私の分離

### 公私の分離



(産業化の中の家族と仕事：T・パーソンズ (Parsons)、1956、「アメリカの家族——パーソナリティおよび社会構造に対するその関連」、T・パーソンズ、R・F・ベールズ著、橋爪貞夫・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝典・山村賢明訳『核家族と子どもの社会化』(上・下)、『家族』(合本版)黎明書房、1970・1971=1981)の内容を元に、中里が作図)

数の人、この図で言うスーツを着た夫が家庭から出て行って、業績主義的価値の中で日々戦いをして、夜になると戻ってきて、その労働力を再生産させる。こういう仕組みで夫は何かを取ってくる、家族を維持するためにお金を持ってきたりするという役割を持って、妻はこの中を安定化させたり、温かい家庭を作るとい役割を果たすんだという社会システムの説明をしました。それが近代に適合的で、形としては核家族であると言ったわけです。

そのとおりのものが日本の高度成長期の中で、長男はおじいさん、おばあさん、お父さん、お母さんと同居しているかもしれないけれども、たくさん兄弟がいましたので、二三男が都市

いうことによつて判断する。このような違う価値観の世界なので、なるべくそこが混ざっては効率がよくない。なるべく少





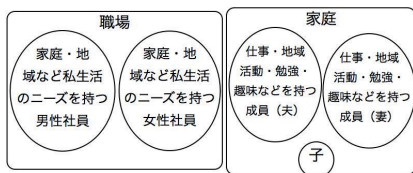
ども、子育て、家事に使う時間が非常に長い社会というのが日本の特徴だと言えます。

これは私の子どもの連絡帳です。真ん中の子が小学生になったときに、私が学校の準備のチェックを任せられる状態になったんですが、準備しなければいけないものが非常に多い。これを見ても何の暗号かわからないことが書いてありますが、「1日おわり」は時間割どおりということです。時間割表を別に見ないといけない。子どもがわかればいいですけども、一年生の頃はなかなか大変。真ん中の子は四年生でもしょっちゅう忘れ物をしています。それに国語だけでも、漢字ドリル、漢字ノート、漢字練習帳、国語のノート、国語の教科書、それから音読カードとか非常に量が多いですし、それを忘れると先生に「また忘れ物です」と書かれるので、親が見ないわけにいかない。「子ども自身にやらせるべき」と言われることがあるのですけれども、連絡帳には「忘れ物がありました」と書かれてしまいうそうすると、親にとってはプレッシャーになってしまいますので関わらざるを得ない。非常に役割期待が大きい。

長時間労働はよく言われることですが、帰宅時間に一番はつきり表れています。先ほどの報告で帰宅時間のデータがあつてわりと早く帰っているなと思いましたが、東京のデータを見ると八時以降の人が八割ぐらい。スウェーデンですと五時前に帰る人が半分。フランスはもう少し遅いですけども、日本ほどで

図6 仕事と生活の統合モデル

## 仕事と生活の統合モデル



はない。ヨーロッパはそんなものかなと思われるかもしれないので、アジアではどうなのか。父親の帰宅時間は北京、ソウル、どちらも首都ですが、ソウルは二〇時台、北京で一八時台に帰宅時間のピークがあります。東京は二一時台から二三時まで高くなっている。大阪はもう少し早いかもしれませんが。

今は公私は分けられるという前提で生きている社会だと思っておりますが、それをどういうモデルに変えていったらいいのか。あるいはもう変わらつつあるけれども、うまく移行できていないのでいろいろな悩みが生じていると思います。新しいモデル(図6)では、先ほどのモデルとは、家庭の中の夫と妻の役割が変わっています。子育てや家事だけではなく、地域活動

もありますし、勉強したいこともあるでしょうし、趣味もある人もいます。私は地元で武道をやったり、バンド活動をしたり、妻も、スポーツクラブに行ったりしています。夫であっても妻であっても、それぞれ違う世界が活動している。その人たちが職場に出掛けていく。職場から見ると、仕事だけにすべてを捧げられる人ではなくて、家庭のニーズもあるし、地域などの



私生活のニーズもある立場に変わっていく。それは男性だけではなくて、女性も同じような社員になっていく。だけでも、家庭に専業主婦がいる、あるいは家事に支障のない範囲でパートタイムをしている女性が家庭で何かをしてくれている状況ですと、男性社員の背後にあるこのようなニーズがほとんど見えないう状態が多くの会社で起こっている。

では、このモデルをどうやって実現していくか。まず、職場における私生活の可視化です。そう簡単にはできないから悩んでいるんだと思うんですが、私がオーストラリアに在外研究に行く機会がありまして、南オーストラリア州にあるアデレードのワーク・アンド・ライフ研究センターに行きました。文字通りこのテーマの研究をしている研究所です。この写真は、そちらのクリスマスパーティーの様子です。日常の様子ではありませんが、夕方五時ぐらいには仕事を終えて、職場に家族が来て、家族参加でパーティをする。

これは甲南での私のゼミの合宿の様子です。二回生を連れて親睦を深めるために合宿に行きます。子どもたちも塾の講習とか、だんだん行事が多くなって忙しいんですが、できれば三人だったり二人だったりを連れていきます。学生たちには、働いている男性の背後にこういうややこしい存在がいることも見せることができますし、この間妻には自分の時間ができる。男性の学生たちが同じ部屋に泊まることになるので、学生一人が一

人の子どもを担当みたいな形でやってくれています。すごくないと思います。なかなか子どもの世話をする機会はないと思いますが、結構上手ですね。

これは、先ほどの研究所です。何かの事情だか忘れたんですが、犬を連れてこないといけない事務の人がいまして、一日犬が研究所をうろろしていました。夏休みになると所長の子どもが所長の横で宿題をやっていたりということがありました。向こうは、子どもを誰かが見ていないといけないというかなり厳しいルールがありますので、家に置いていけないという事情があるときはそうしていました。

連れてくるというのはかなり目立つ形で目を引くんですけども、可視化するというのは必ずしもそれだけではありません。ほかにということが可能かというところ、ある会社では、ワークシヨップのようなこと、研修のようなことをしています。社員同士で、両立で何が難しいのか、普段どういうことに悩んでいるのかを書いてもらいます。それを既に経験している人がアドバイスするという機会を就業時間中に設けています。

子どもがいる場合は、「子どもの病気になる」と自分自身の体力が落ちてしまうので、仕事が回らない。家庭も仕事も悪循環になる」と話すと、経験者は「完璧を目指さず、早い段階であきらめるとか、妥協する」、そういったことを伝える。これでは解決にはならないとしても、こういったことに悩んでいる同

僚がいるということがお互いに伝わる機会を持つことは非常に大事なのではないかと思います。

ある人が「帰りに急な仕事が入って、自分は子どもを迎えに行かないといけないので、チームのメンバーに負担がかかる」ということで気に病んでいる。これに対して、「チームメンバーの負担をかけることは感謝を示しておいて、ほかの形で返せばいいんじゃないか」と上司に当たるような年齢の人が伝える。こういった機会を持っている会社があります。ですので、仕事以外の事情を話せる機会を作って、お互いの状況を理解するということが重要になるだろうと思います。

先ほどは職場のほうで生活を可視化するということが、実は女性にとっては、生活における仕事の可視化のほうが大変なのではないか。よく子育てや家事に支障のない範囲でパートをしているという形があります。そうすると、夫のほうには妻が忙しく働いている姿が全く見えません。妻が仕事との両立で悩んでいることもなかなか見えにくい。これが可視化されていれば、夫がそばにいれば、ちょっととまずいなと思うかもしれない。

こちらは男のほうの可視化です。次の日の準備をしているのかどうかわかりませんが、なかなか仕事が進まない。これは一歳になる前の長男です。このときは妻が起きていたので私も機嫌よくやっていますが、妻が疲れて寝てしまうと私もカリカリ

してくる可能性があります。論文を書かないといけないので、子どもをサークルに入れるとギャーギャー言うので、子どもは自由にさせておいて、自分がサークルの中に入ることもありま

す。

これがいいのか。企業で在宅勤務となると、こういうことをやっていたら労働時間に数えてもらえませんので、これでいい方向だとは思わないですけれども、仕事を持っている存在であることは確かです。奥さんのほうも仕事なり趣味なり、やらなければいけないこと、やりたいことがある。これをお互いに状況の理解を共有することで、これでいいのかという意識を持つ。そうでないと、仕事が終わるまで会社にいられるということが、特に男性のほうに当たり前のようになっています。

ワーク・ライフ・バランスから仕事と生活の統合へと言いましたのは、区別をなくして混ぜてしまえばよいということではありません。スパッと分けられれば、それは気持ちの切り替えもできて一番いいわけですけれども、それはそう簡単ではないよということを社会全体で共有する、家族の中で共有することが必要ではないかと思えます。ですので、すべてをトータルで考えて、調和を考える。

それから、先ほどから、母性愛、母親にはかなわないという話がありました。その思い込みを外す。長男が小さい頃寝かす時間に苦労していました。これはニコニコしていますけれども、

この後もだんだん二時ぐらいになると腹が立ってくる。これだけ小さいときは、腹が立つというよりは自分がつらいことが多かったんですけれども。寝かしつけでお母さんになわなわないと思うことは非常に多いです。多いんですけども、普段お母さんといるので、そっちに行ってしまうんですけども、「今日は遅くならないと帰ってこないよ」となると、子どもはあきらめがつく。逃げていく場所がありませんので、僕のところで寝てくれます。

それから、これはオーストラリアでの父親の子育てサークルで、家事育児の全体像を把握する機会ということでお示ししています。母親の育児サークルと同じようなことをします。マーブルチョコレートを砂糖を溶かしたアイシングで貼って、クリスマスのカウントダウンカレンダーを作ったりする。これを「あと一日でクリスマス」と言って食べていくと、このお父さんみたいな体になってしまう。ちよっと別なものにしたほうがいいんじゃないかと思うんですけども。絵本の読み聞かせもそうです。お父さんが力で遊ぶというのは、別にお父さんの専売特許ではありませんし、お父さんみんなの力が強いわけではないので、お父さんはいろいろな役割ができる。

先ほどの「ママがいい」の続きです。自分が泣いていた動画パソコンで見て、本人はけろっとしている。「なんで泣いてる？」と聞くと、「家で泣いてるの」と笑いながら答えています。普

段世話をしてくれる人が出ていけば、それは泣くわけですけれども、それで三時間泣いていたという話はあまり聞いたことがないと思います。一五分くらいで泣き止む。そこでお母さんじやなきや駄目だとあきらめずにやっけていく。お母さんのほうも別に自分じゃなくてもなんとかなることを知って対応するということとは必要ではないか。

今見た父親と母親の役割の再検討ですとか、仕事と生活の統合、どちらにも共通しているのは、あまりにも当たり前という線がわれわれには多すぎる。それで公と私ですとか、仕事と生活、それから男と女、そこに本当に線があるのか。別の、例えば社会に出ているかどうかの違いであるとか、自分が置かれている立場の違いに原因があつて、別に性別の問題じゃないのだから、その領域を変えろという工夫で変わってくるんじゃないか。そういったことを考えていくのが全体の解決の一步につながっていくのではないかと思います。

以上で終わります。

高石 どうしても子育てを母親が背負いがちになってしまつて、お父さんが自信なく、迷いつつ、周辺をうろろろしてしまつて、いう現状の背景にあるのは社会のシステムですね。特に高度経済成長時代以来、それが当たり前ようになってしまつている社会のシステムの問題をもう一度見直していこうという観点か

らもお話をいただきました。と同時に、若きパパとして奮闘中の中里先生の画像も堪能させていただきました。ありがとうございます。